

ひきこもり70万人

内閣府推計 「予備軍」も155万人

家や自室に閉じこもって外に出ない若者の「ひきこもり」が全国で70万人に上ると推計されることが、内閣府が23日に発表した初めての全国実態調査の結果から分かった。また、将来ひきこもりになる可能性のある「ひきこもり親和群」は155万人と推計しており、「今後さらに増える可能性がある」と分析している。〈解説②面〉

調査は2月18～28日、全国の15～39歳の男女5000人を対象に行われ、3287人(65・7%)から回答を得た。

「普段は家にいるが、自分の趣味に関する用事の時だけ外出する」「普段は家にいるが、近所のコンビニなどには出かける」「自室からは出るが、家からは出ない」「自室からほとんど出ない」状態が6か月以上続いている人を、ひきこもり群と定義。

「家や自室に閉じこもって外に出ない人たちの気持ちに分かる」「自分も家や自室に閉じこもりたいと思うことがある」「嫌いな出来事があると、外に出たくなくなる」「理由があるなら家や自室に閉じこもるのも仕方がないと思う」の4項目すべてを「はい」と答えたか、3項目を「はい」、1項目を「どちらかといえば「はい」と回答した人を、ひきこもり親和群と分類した。

また、「家や自室に閉じこもって外に出ない人たちの気持ちに分かる」「自分も家や自室に閉じこもりたいと思うことがある」「嫌いな出来事があると、外に出たくなくなる」「理由があるなら家や自室に閉じこもるのも仕方がないと思う」の4項目すべてを「はい」と答えたか、3項目を「はい」、1項目を「どちらかといえば「はい」と回答した人を、ひきこもり親和群と分類した。

その結果、ひきこもり群は有効回答の1・8%、親和群は同4・0%。総務省の2009年の人口推計で15～39歳人口は3880万人であることから、ひきこもり群は70万人、親和群は155万人と推計した。ひきこもり群は男性が66%と多く、年齢別では30歳

代が46%を占めた。一方、親和群は女性が63%を占め、10歳代の割合が31%と高かった。ひきこもりとなったきっかけが46%を占めた。一方、親和群は女性が63%を占め、10歳代の割合が31%と高かった。

ひきこもりになったきっかけ	割合
職場になじめなかった	23.7%
病気	23.7
就職活動がうまくいかなかった	20.3
不登校(小学校・中学校・高校)	11.9
人間関係がうまくいかなかった	11.9
大学になじめなかった	6.8
受験に失敗した(高校・大学)	1.7

(内閣府調べ、複数回答)

家庭・学校・地域の連携必要

内閣府が23日に発表したひきこもりに関する全国実態調査は、社会的自立の度合いに着目し、「趣味に関する用事の時だけ外出」(推計46万人)とした人もひきこもりに分類した。これを除く「狭義のひきこもり」(同24万人)が、厚生労働省が5月に公表した「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」の推計26万世帯に相当するとしている。

調査の企画分析委員の座長を務めた高塚雄介明星大学教授(心理学)は、「ひきこもり親和群」は若者が多い。そうした若者が社会に出て、辛うじて維持してきた友人関係が希薄になったり、新しい環境に適応できなかつたりして、『ひきこもり群』がじわじわ増える」と警鐘を鳴らす。

内閣府は調査にあわせ、自治体や学校への支援の手引書をまとめた。家庭、学校、地域社会が、人ごとでないとの意識で連携する必要があるとだ。

(政治部 青木佐知子)

2010年(平成22年)7月24日(土曜日)

言説



ひきこもり

1面

内閣府が23日に発表したひきこもりに関する全国実態調査は、社会的自立の度合いに着目し、「趣味に関する用事の時だけ外出」(推計46万人)とした人もひきこもりに分類した。これを除く「狭義のひきこもり」(同24万人)が、厚生労働省が5月に公表した「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」の推計26万世帯に相当するとしている。